

13. ちょうどこの日、ふたりの弟子が、
エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。
14. そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。
15. 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。
16. しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。
17. イエスは彼らに言われた。
「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」
すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。
18. クレオパというほうが答えて言った。
「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」
19. イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。
「ナザレ人イエスのことです。
この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。
20. それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。
21. しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。
事実、そればかりでなく、
その事があってから三日目になりますが、
22. また仲間の女たちが私たちに驚かせました。
その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、
23. イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。
そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。
24. それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、
はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」
25. するとイエスは言われた。
「ああ、愚かな人たち。
預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。
26. キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」
27. それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、
聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。
28. 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなご様子であった。
29. それで、彼らが、
「いっしょにお泊まりください。
そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、
イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。
30. 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。
31. それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。

するとイエスは、彼らには見えなくなった。

32. そこでふたりは話し合った。

「道々お話しになっている間も、

聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

33. すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、

34. 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。

35. 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。

36. これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。

37. 彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。

説教

イエスさまの復活は初代教会のキリスト信仰の中心と言うべきものです。

イエスさまは罪深い私たちの身代わりとなって、父なる神さまのさばきを受けて十字架で死なれます。そのことによって私たちの罪は完全に贖われることとなります。でも、それで終わりなら弟子たちの生き方変わることがありませんでした。なぜなら弟子たちは、イエスさまが十字架で死なれた時ひとり残らず逃亡し、それから二日経ち三日経っても、自分たちの潜伏している部屋の鍵を固く閉じて相変わらず臆病に逃げ回っていたからです。そのような弟子たちに対し、イエスさまは、十字架で死んで彼らの罪を贖うのみならず、復活し、彼らに現れ、生きて働いて、弟子たちの信仰を励まされます。父なる神さまの恐ろしいさばきを受けて、すなわち、最後の審判を受けて、人類の罪を清算した後の新天新地に属する永遠のいのちによみがえったイエスさまの復活の姿は、当然弟子たちにまさしく天地がひっくり返るほどの巨大な衝撃を与えたことは言うまでもありません。

しかし、それと同時に、復活なされたイエスさまが、どのように弟子たちにご自身を現し、彼らを励まそうとされたかを私たちは知る必要があると思います。イエスさまは、ただ死人の中からよみがえって天に挙げられて、それで今日まで何もせずにおられるのではありません。イエスさまは、復活なされた後に、生きて働いて弟子たちを力づけ、ご自身のみからなる教会を生み出し、教会を守り、教会を前進させてこられました。つまり、キリストの復活なくして教会はあり得ませんでした。さらに言えば、復活のキリストなくして、復活のキリストの生きたお働きがなければ、今日のキリスト教会はあり得ませんでした。

ルカの福音書 24 章には、エルサレムから 11 km 余り離れたエマオという村に行く途中の二人の弟子たちに、復活のイエスさまが現れた様子が記録されています。

二人の弟子たちは、つい二日前に十字架で殺された主イエスさまのことについて話し合い、熱を込め論じ合って(原義は「共に追求し続けて」)おりました。すると、そこへ復活なされたイエスさまが近づいて来て、彼らと共に道を歩まれます。そして、「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか」とお尋ねになります。この時、「ふたりの目はさえぎられていて」、その方がイエスさまだとはわかりませんでした。イエスさまの質問に、ふたりは暗い顔つきになって立ち止まり、「この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ」と望みをかけていた「力ある預言者」イエスさまが十字架で死刑にされ、のみならずその亡骸は紛失し、おまけに墓を見に行った女性たちが天使たちの幻を見てイエスさまが生きておられると告げたということで、すっかり訳が分からなくなってしまった次第を説明します。すると、イエスさまは次のように叱責なさいます。「ああ、愚かな人たち。預言者

たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」そして、イエスさまは、「モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」のでした。エマオの村に到着するや、弟子たちはイエスさまと一緒に泊まるよう引き留め、共に夕食の席に着いて、イエスさまが「パンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された」その瞬間に、「彼らの目が開かれ、イエスだとわかった」のでした。すると、すぐにイエスさまは彼らの目の前から見えなくなりますが、ふたりの弟子たちは次のように話し合います。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

以上が復活のイエスさまとエマオ途上の弟子たちとの出会いです。暗く絶望し、混乱している弟子たちに対して、イエスさまはどのように彼らの信仰を励ましたのでしょうか。

まず第一に、イエスさまは弟子たちに「近づいて、彼らと共に道を歩」まれました(15)。第二には、「モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされ」ました(27)。そして、三番目には、「パンを取って祝福し、裂いて彼らに渡され」(30)、さらには、彼らの目を開いて彼らがイエスさまを知るようになさったのです(31)。

つまり、こういうことになります。復活のイエスさまは、①罪深い弟子たちの身代わりになって十字架で死んで弟子たちの罪を贖ったのみならず、②死人の中から復活して弟子たちに現れ、③彼らを見捨てることなく、彼らと共に歩み、④彼らに聖書のみことばを教え、⑤パンを祝福し裂いてお与えになり、⑥さらには彼らがイエスさまを知るよう彼らの目を開かれたのでした。このような、手取り足取りの、全面的な、復活のイエスさまの生きた働きかけがなければ、弟子たちがイエスさまを知ることがなかったのは言うまでもありません。

これが、イエスさまの復活がなければ初代教会のキリスト信仰はあり得なかったということの意味です。イエスさまの復活それ自体は、確かに死んでいた者がよみがえったという人類の歴史に於いて未曾有の出来事であるという意味で革命的な事です。加えて、それは単なる仮死状態からの蘇生ではなく、本当に死んでいた状態からのよみがえりであり、さらに言えば、最後の審判を終えた後の、人類の罪をすべて清算してしまっただ後に現れる新天新地のいのちであり、もう二度とさばかれることのない、審判されることのない、永遠のいのちであるという事実も十分に革命的な事です。しかし、それだけの理解ではまだ不十分です。復活のキリストは、天に挙げられて、ただ一度十字架でさげたご自身のいけにえの効力をもとに、父なる神の右の座でとりなし祈ると共に、弟子たちの所に現れて、彼らと共に歩み、彼らにみことばを教え、彼らにご自身のみからだをあらわすパンを祝福し、裂いて、与え、さらには彼らの目を開いて、彼らがイエスさまを理解するようになさいます。つまり、復活のキリストは、復活して、また死んだのではなく、むしろ生きて働いて、弟子たちを教え、励まして、この二千年間ご自身のみからだなる教会を前進させてこられたのです。復活のイエスさまのこうした生きた働きかけによって、暗く絶望していた弟子たちの心に光が差し込みます。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」(32)「燃えていたではないか」の直訳は「燃やされていたではないか」あるいは「深く心動かされていたではないか」という具合に受け身となります。この場合、完全に冷え切った彼らの心を熱く動かし、燃え上がらせたお方が他ならぬ復活のイエスさまであることは、言うまでもありません。中でも、「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も」と彼らが言うように、イエスさまのお話が、彼らを熱く燃やしたことは想像に難くありません。そして、その話の中核は「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか」という事実です。

イエスさまは、キリストが十字架の苦難を受けることで終わらず、必ずその後に復活することを明らかにされました。そして、そのことが既に旧約聖書で預言されていたことを明らかにしました。つまり、苦難で終わって

しまっている弟子たちの信仰を、もう一度新たに復活から説き明かして教えたのです。

そして、イエスさまはそのことを充分理解しておられました。つまり、復活という栄光を知っていた上で、十字架に架かられました。もっと言えば、復活することを知っていたからこそ、十字架で死ぬことができたのです。このことをヘブル書の記者は次のように言います。

「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、

はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」 ヘブル 12:2

つまり、たとえ死んでも復活することがわかっていたからこそ、イエスさまはどんなに悲惨で苦しい十字架の死をも死ぬことができた、というのです。イエスさまにとって、「復活」こそ恐れることなく父なる神さまのみこころを行わせる全能の神の力でした。そして、この「復活」こそが、初代教会の弟子たちをして、死をも恐れず福音を証しして主に従い行かせる、全能の神の御力なのでした。

私たちも同じではないでしょうか。復活の主イエスさまは今も生きておられます。今も生きて働いて、私たちに恵みを施しておられます。復活の主が私たちに伝えたいことは、復活のいのちです。さばかれない、罪贖われた、罪赦された、永遠のいのちです。復活のいのちが備えられていることを教えるために、復活の主は今も生きて働いて、私たちと共に歩み、私たちにみことばを教え、永遠のいのちがよくわかるよう、恵みの補助手段として、ご自身のみからだなるパンを取り、祝福して後、これを裂き、与えて、霊の眼を開いて、イエスさまを理解させ、心を熱く燃やしてくださいませ。

私たちが教会で受ける恵みはすべて主の恵みです。主の恵みということは、復活の主の恵みです。これらはすべて復活の主のみわざです。目が開かれなきゃわかりませんが、目が開かれれば、すべては復活の主の恵みであることがわかります。